

は じ め に

この年報は1991年度に当研究所が行った研究活動と事業のうち、主要なものを報告すると共に、予算・機構等の事務的概要をとりまとめ、当該年度における研究所のあゆみを紹介するものである。

研究活動の中心となる発掘調査は、飛鳥藤原宮跡発掘調査部が24件、8,580m²、平城宮跡発掘調査部が31件、15,723m²に及び、その中には相変わらず開発に伴う緊急調査が多く含まれている。飛鳥池遺跡・雷丘北方遺跡がその代表で、前者は飛鳥地域で初めて大規模な工房跡を見出し、7世紀末の手工業の実態を知ることができた。その成果を1992年秋の飛鳥資料館特別展示「飛鳥の工房」で発表している。雷丘北方遺跡は従来全く予想されなかつた位置に大規模な宮殿と思われる遺跡が発見されたもので、その主人公の特定を含め範囲確認や保存対策が今後の大きな課題となった。平城宮跡関係では第二次朝堂院東第四堂を調査し、これで第一堂から第四堂に至る南北棟建物については全容を解明することができた。また朝堂院前方の官衙についても式部省とその東方官衙を調査し、東方官衙の下層遺構が奈良時代前半期の式部省で、のちに兵部省と対称の位置に移ったことが明らかになった。

なおこうした発掘調査に伴う新発見でこの年度の特筆すべき成果としてトイレ遺構の解明がある。藤原京右京七条一坊から発掘されたトイレは、籌木の遺存だけでなく科学分析によって食物残渣、寄生虫の卵などを検出し、トイレ遺構調査法に新しい技術を確立した。土中からの寄生虫抽出例として我が国最初の報告である。早速にそれが応用され、平城京二条二坊の坊間路西側溝で不明とされていた遺構が水洗トイレであることも判明した。恐らくこの方法によって今後全国各地でトイレの存在が確認され、当時の食生活や生活環境を細かく知ることができるものと思われる。

そのほか鳥取県上淀廃寺出土の壁画保存などの開発的研究が進み、また飛鳥資料館では開館15周年記念特別展として、飛鳥とはゆかりの深い百濟から近年の出土品を借用して「飛鳥の源流」展を開催したのも意義深いものであった。また文化財保護にかかわる研究協力の一環として、シベリヤ・パジリク古墳発掘に参加するなど、国際化が一層進展したのも特記すべきであろう。

今後とも多くの方々の暖かい御指導、御後援を賜りながら、当研究所の発展を期したい。

1993年2月

奈良国立文化財研究所長

鈴木嘉吉